

近代英国翻訳論 —— 解題と訳文 欽定訳聖書 翻訳規程および序文(抄)

大久保友博

(大阪市立大学非常勤講師)

本稿は、17 世紀初めのイギリスで成立した欽定訳聖書の翻訳規則および序文の日本語訳(うち後者はまとまった形での訳出は本邦初)を試み、近代英国および翻訳史上の理解に必要な情報も併せて簡便に提供するものである。構成としては、まずは成立の背景に短く触れ、そののち底本テキストの検討、日本語による訳文という順に、まとめて記述する。

1. 内容・背景について

1611 年に刊行された欽定訳聖書(The Authorized Version (AV) or the King James Bible (KJB)) は、17 世紀初頭の英国翻訳史を考える上でも、最重要のもののひとつである。聖書の翻訳に言及する際には、先述のような特定の訳本を示す言葉や略号が付されるのが通例であるが、英国のペンギン古典叢書ではそうした表記もなくただ"The Bible"という題で出版されていることから、英国では「聖書」と言えば「欽定訳」のことだとして名実ともに権威を持つものとして受け取られていることがわかる。とりわけ 20 世紀に至るまでの 300 年間は、英訳聖書の代表的地位を揺るぎないものにしてきた。

翻訳の始まった契機は 1603 年、即位のためジェームズ王(Charles James Stuart 1566-1625)がスコットランドからイングランドへとやってきた際に清教徒からなされた上奏である。新しい英訳聖書を作るべきだというその内容に、自身かなりのディレタントで神学にも関心のあったジェームズ王も心動かされる場所があったようで、即位後の翌年、ハンプトン・コート宮殿(Hampton Court Palace)において御前会議が開かれることとなった。宗教対立する国内諸派をまとめるための会議でもあったが、聖書新訳については、オックスフォード大学の清教徒ジョン・レノルズ(John Rainolds 1549-1607)を筆頭とする推進派と、カンタベリ大主教のリチャード・バンクcroft(Richard Bancroft 1544-1610)ら慎重派が対立し、結果としては慎重派が方針をまとめつつ、推進派が実行役となるということで決着する。

そしてこのバンクcroftが中心となって定められたのが、15 箇条の翻訳方針である。その第 8 から第 13、また第 15 の条文にあるように、かなり計画的かつ組織的な翻訳作業が行われた。聖書をいくつもの箇所分割したあと、「同章担当の各班班員がみな、各自の裁量で翻訳ないし改訳したのち、全員集合して訳出されたものを合評、各箇所について決定稿をまとめ」、さらにその訳は他班による批判と検討にさらされ、疑問点を全体会議や外部学識者や権威の意見で解決しつつ、入念に訳業が進められていった。こうした聖書新訳は、当時の学者を総動員した国を挙げての一

大事業であり、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、ウェストミンスター大聖堂の碩学たちを集め、さらに学識さえあれば田舎牧師でさえも翻訳団の一員とされた。聖職者である彼らには、平日は大学で訳し、土日は地元に戻って勤めを果たす、といった生活を繰り返した者もあったという。

方針に従って翻訳グループは6つ作られたが、その班分けは以下の通りである。

班	人数	場所	担当箇所
1	10	ウェストミンスター	「創世記」～「列王紀下」
2	8	ケンブリッジ	「歴代志上」～「雅歌」
3	7	オックスフォード	「イザヤ書」～「マラキ書」
4	7	ケンブリッジ	「外典」
5	10	オックスフォード	「福音書」「使徒行伝」「黙示録」
6	7	ウェストミンスター	「ロマ書」～「ユダの手紙」

表 1 (Norton 2011a: 54-60)

翻訳は長期に及んだため、途中で職を辞したり、死亡したりする者もあったが、やがて各班によって訳された原稿がロンドンに集められ、代表12名による推敲を経て、印刷所に持ち込まれ、さらにその過程で9ヶ月にもわたって細かな校正が行われることになる。

そしてこの一大翻訳事業で、実務の中心的役割を果たしたのが、第3班オックスフォード大学旧約翻訳グループの統括役にして、2名いた訳文全体の最終責任者のひとり、聖職者マイルズ・スミス(Miles Smith 1554-1624)であった。最初に手をつけ、最後に訳筆を置いた人物ともされる彼は、大学外から参加した数少ない訳者のひとりでもあった。矢羽根屋の息子であったスミスは、オックスフォード大学卒業後も聖職者としてもあまり大したことをない職を歴任し、中央から離れた地方にいたのだが、そのような彼が訳者に大抜擢されたのも、その卓抜した学識のゆえだった。1573年に学士号、76年に修士号を得たあとも日々の務めに勤しむかたわらこつこつと学業に励み、85年に神学学士、94年ついに神学博士になったスミスには、比類ない古典の知識と語学の才能があり、旧約聖書の言語であるヘブライ語はもちろんのこと、アラビア語、カルデア語、シリア語も堪能だったという。

この聖書学者でもあるマイルズ・スミスは、翻訳の責任者として欽定訳聖書に「翻訳者一同から読者へ」("The Translators to the Reader")と題した序文を寄せているが、その記述は聖書翻訳史への深い配慮と、敬虔かつ寛容な信仰に裏打ちされた優れた翻訳論でもあった。スミスは、その序文の冒頭を、それまでにあった聖書英訳の試みと、自分たちに先行する翻訳者たちのことを意識しながら、彼らが受けた仕打ちを、「冷ややかな待遇 Cold entertainment」あるいは「白眼 suspicion」「嫉視 emulation」と記している。穏やかな表現にしているが、むしろ聖書学者たるスミス自身、実際には何が起こったかを知らないわけではない。聖書の先行訳は、時に異端とされ、また焚書され、その訳者自身も時代に翻弄され、多くの関係者が処刑されてきた。記述は抑制的でありながらも、第一にそのことに触れる筆者には、まず何よりも先にいた聖書英訳者たちの悲運が念頭にあったに相違ない。14世紀に早くも英訳聖書に取り組んだウィクリフ派は、異端者として弾

圧されるとともに、聖書の英訳とその読書を禁じる憲章ができるに至り、その禁を犯した 16 世紀初頭のティンダルの英訳聖書は度重なる焚書を受けてほとんど残らず、また本人も火刑にされてしまう。そして国教会のなかで英語聖書を推進しようとした人々も、その都度ある程度の成果を残しながらも、政争や宗教対立に巻き込まれて処刑されていったのである。

こうして聖書英訳は、度重なる迫害や困難に見舞われながらも、それでもその意思を引き継いでいったわけだが、継承されていったのはその訳文も同様だった。スミスの序文にも、そのことははっきりと明記されている。「初めから、新訳作成の必要がある、または拙い訳を立派な訳にしなければならないとは考えたことはなく」、「立派な訳を改善すること、つまり立派な諸訳から、異論の余地もない、代表格の良訳を作ることを考えた」と述べるように、欽定訳の制作にあたっては、あらかじめ先行訳を踏まえることが意図されていた。具体的にどういった訳を参考にするかは、翻訳する際に前もって定められた 15 条ある規則のうち、第 1 と第 14 に記されており、当時国教会で使われていた主教聖書のほか、ティンダル訳、カヴァーデイル聖書、マシュー聖書、大聖書、ジュネーヴ聖書が公式に参照され、そしてスミスの序文ではカトリック側の作ったリームズ聖書の訳語が批判されていることから、この訳もまた参照されたことは間違いないだろう。

実際にどれくらいの訳文が継承されているかについては、すでに見積もりがなされているが、新約聖書の 83%、旧約聖書の 76%がティンダル訳に基づくものだと言われている(Tadmor 2010: 16; Daniell 2003: 448)。数値だけなら欽定訳だけがティンダル訳を大きく引き写したように見えるが、そうではない。欽定訳が参考にしたカヴァーデイル聖書もマシュー聖書も、そもそもがティンダル訳を元にしたものであるし、そのあとの大聖書、主教聖書、ジュネーヴ聖書、そしてカトリックのリームズ聖書までもが、ティンダル訳と同程度の一致を見せている。これらの聖書は、過去の成果をもとにしながら、少しずつ改訂を加えていった一連の訳業なのである。その上で、先の翻訳で加えられた修正も良いと思われるものはそのまま受け継いでおり、独自の改訂も加えている。

こうした作業は単なる剽窃というものではないし、訳業に従事した各聖書の訳者たちも、訳文をあとにどう継承させていくかを常に意識していた。焼かれてもなお、さらに正確な訳が出るなら歓迎するとしてティンダルがいる一方で、その友人であるマイルズ・カヴァーデイル(Miles Coverdale 1488-1569)は、国教会から依頼されて聖書英訳の事業を引き継ぐ際、なぜ英訳聖書の仕事を受けたのかを自分の編纂した聖書の序文で述べつつ、「豊かな学識を持っているのみならず、障害さえなければ手がけた訳業を精魂傾けて完遂したであろう先人たちの悲運を思い起こす」(永嶋 1988: 74)として、先人の無念もまた訳文とともに引き継ごうとする。翻訳そのものが禁止され焚書された時代にあっては、翻訳そのものが困難で、かつ貴重で尊いものであった。その意思を受け継ぐことは、その訳文を引継ぎ完成へより近づけるということであった。

しかしなぜ聖書を翻訳するのか、という問いを立てた場合、もっとも簡単な答えは「信仰のため」ということになるだろう。さらに言えば「自分の信仰のため」である。ゆえに訳文はその自分の信仰が反映されたものにほかならず、そのためその訳から信仰上の議論が繰り広げられることになる。欽定訳聖書に先だって定められた 15 箇条の翻訳方針のうち、第3から第6はこの点に配慮したものである。とりわけ欽定訳の前にカトリックによる翻訳が出ているが、清教徒からは、ただ英文にただけで誰にでも「読める」わけではない、という批判も出ていた。欽定訳聖書が、ギリシア語源

の"church"やラテン語源の"priest"を伝統的な用語として採用しつつも、一方でラテン語由来の"testimony"や"azymes"を訳語として排するのは、その「読める」かどうかのバランス感覚から来るものだ。こうした学者間の議論を背景にして、スミスは訳語の選択について、欽定訳聖書序文の末尾「用語の一致」の節で述べているが、その「現地語でもわかる」ための基準はつまり、ギリシア由来の"baptism"は英語としても定着しているからわざわざ"washing"では言い換えないが、"pasche"のようにヘブライ語そのままではさすがにわからないので採用しない、ということでもある。もちろん学のある聖職者であればその語の意味はわかるのだから、ここで想定されている「現地語」あるいは読者がそうした人々でないことは明らかだろう。

「聖書の賛美」の節にあるラテン語の"tolle, lege"とは「取って読め」ということだが、取って読めば日々の苦難を癒やしてくれるとするスミスの記述は、民衆の日常に寄り添ったものでもあろう。そして欄外注を原則廃したことは、解釈に踏み込まないということでもあり、むしろ当時英国に存在した諸派への配慮が見て取れるのだが、そうした逐語的な本文がテキストのみで万人に開かれることは、読者にはまた別の意義を持つものであった。「翻訳の必要」の節に現れる有名な翻訳の比喩「翻訳とは、光を入れるために窓を開くこと、その実を食べられるよう貝の殻を割ること、至聖なる所を覗けるよう幕を脇へ引くこと、水が手に入るよう井戸の蓋を外すこと」の要点は、何よりも聖書を「見る」のは、「読む」のは、「考える」のは、読者自身であるということを言い表したことにある。翻訳はあくまでも補助に過ぎないとして、解釈を廃して逐語訳に徹する。翻訳は窓や幕を開けるが、最終的に光を見るのは読む人自身であり、本文から意味という実を考えて食べるのは信者本人なのであると。

わかりやすい語彙に限定し、そして解釈を限定しないようできる限り文字通りに訳すという手法は、読みの多様性を保障するものでもある。読書の自由は解釈の自由を生む。当時の英国は、カトリック・国教会・非国教会と三分されており、国教会のなかでもさらにどちら寄りであるかという大きな揺れがあった。この諸派をまとめるためには、何よりも解釈の自由が必要であったのだ。固有の党派の読みを採用しなければ、それぞれの解釈が可能になり、共存できる。今の国教会にある、様々なスタンスを許す姿勢というものが、すでに欽定訳そのものにあると言っていいだろう。すべての解釈をあらかじめ許しつつ、そして先人たちの努力と無念の結果である訳文を受け継いでいくことが、欽定訳によって達成されている。そして解釈の自由は、信教の自由すらも先取りする。意図していなくても、多様な読みを許す逐語訳は新たな宗派さえも生み得るもので、このあと英国には様々な信仰ができたことは言うまでもないだろう。

欽定訳は、それまでの課題に応えようと、万人の聖書たらんとし、そして教派やセクトを越えたある種の共同訳でもあろうとし、聖書訳者たちの遺志は訳を受け継ぐことによっても達せられた。そのことから生じた読書の自由は、解釈の自由を生み、さらに信教の自由さえも生み出していく。「欽定訳」と言いながらも、実際には御前会議を出発点とただけで、訳に対して王の勅許そのものは出ておらず、その名は単なるあだ名に過ぎない。ただし 1644 年以降、聖書を買うと言えば欽定訳を買うこととなるほどに (Norton 2011a: 138)、広く民衆に親しまれるものとなった。であればむしろ、欽定訳という言葉の権威の源泉は、多くの人々が読み、解釈し、信仰したという事実から生じたものだと言えよう。

2. 底本テキストについて

欽定訳聖書について、最も信頼できうる校訂本は、その成立過程や草稿も含めて本文批判をした以下の書だと考えてよいだろう。

Norton, David (ed.) (2011). *The New Cambridge Paragraph Bible with the Apocrypha: King James Version*. Revised Edition. Cambridge: Cambridge University Press.

本稿では、上記底本の pp.xvii-xxxv に収録された“The Translators to the Reader”に拠った。

また欽定訳聖書の翻訳にあたって事前に出された翻訳規則については、以下の本の pp.179-181 に“Richard Bancroft, *The Rules to be Observed in Translating the Bible* (1604)”としてまとまった形で収められている。

Rhodes, Neil et al. (ed.) (2013). *English Renaissance Translation Theory*. London: The Modern Humanities Research Association.

訳出にあたっては主に上の底本に拠り、Norton (2011a)なども適宜参照した。

なおこれまで、欽定訳聖書の序文を部分引用の形で訳出したものには、以下のような文献がある。合わせて参考にさせて頂いた。

齋藤勇(1944)『文學としての聖書』研究社

永嶋大典(1988)『英訳聖書の歴史 付:邦訳聖書小史』研究社

バターワース, チャールズ・C、齋藤國治[訳](1980)『欽定訳聖書の文学的系譜 (1340-1611)』中央書院

ボブリック, ベンソン、永田竹司[監修](2003)『聖書英訳物語』柏書房

3. 訳文

3.1. 「聖書翻訳遵守規程」

- 1 教会の常用聖書たる通称「主教聖書」を基とし、変更は原典の真理が許す最小限にすること。
- 2 預言者および聖書記者の名は、本文上の他の名とともに、なるべく当地の慣用に合わせる
- こと。
- 3 従来の教会用語を守ること。たとえば Church を Congregation[会衆・集会]などと訳さぬこと。
- 4 ある語に複数の読みがある際は、その箇所^の適否や教義の共観に合致しうるならば、古代教父の大半に通用していたものを守ること。
- 5 章分けは一切変えぬこと、ないしやむを得ぬ場合のみ最小限に。

- 6 欄外注は一切付さぬこと。ただし本文がなかなか簡潔・適切に表し得ず、語釈を敷衍するためヘブライ語・ギリシア語を説く場合のみ例外とする。
- 7 ある書から別の書への適切な参照の用となるべく、引照箇所を欄外に付しておくこと。
- 8 同章担当の各班班員がみな、各自の裁量で翻訳ないし改訳したのち、全員集合して訳出されたものを合評、各箇所について決定稿をまとめること。
- 9 各班この手筈で各書を脱稿したなら、逐一余班へ回送し、熟考深慮の上で検討してもらおうこと。陛下がこの点をたいへん重視されておられるゆえ。
- 10 各班、余書の校閲の際、疑義や異読のある箇所があればその旨を伝えること。すなわち、その箇所を知らせ、あわせて理由も申し送りすること。それでも決着が見られぬ場合、作業終了時に各班班長が会する予定の全体討議にて、論争の折り合いをつけること。
- 11 特別難解な箇所に疑義が残るならば、国内の有識者へ、その箇所についての見解を求める公式書簡を送ること。
- 12 全主教から管区下の聖職者へ文書を送り、進行中のこの翻訳について知らせ、語学堪能な者を最大限動員すること。そして同様に労を執らせ、各人の意見を、ウェストミンスター、ケンブリッジ、オックスフォードの各班に伝えさせること。
- 13 各班班長は、大聖堂ではウェストミンスターならびにチェスターの各主任司祭、および両大学ではヘブライ語とギリシア語の欽定講座担当教授が当たること。
- 14 「主教聖書」以上に本文に即していると合意が取れた場合は、次の各聖書の訳を採用すること——ティンダル版、マシュー版、カヴァーデイル版、ホイットチャーチ版[大聖書]、ジュネーヴ版。
- 15 上述の班長の他、両大学の老大家たる神学者のうち、訳業に携わっていない三・四名の者を、学長が各学寮長と協議の上指名し、ヘブライ語およびギリシア語の監訳に当たらせること。上記第4条をよく守るためである。

3.2. 「翻訳者一同から読者へ」

貶められてきた最善のものたち とかく公共の善を進める熱意は、ある事を自ら発案してであれ、また他人の労になるものを改訂してであれ、確かに大いなる敬意尊崇に値するも、世間からは単に冷ややかな待遇を受けるに過ぎない。それは親愛の代わりに白眼をもって、感謝の代わりに嫉視をもって迎えられる。あら探しの付け入る隙があれば(隙がなくてもあら探しがそれを作るなら)、きっとそれは誤解され、非難にさらされることになる。このことは、事情を知るか覚えのある者はみな容易に認めてくださることだろう。 [...]

貶められてきた至高の偉人たち [...]

貶められたにもかかわらず、陛下は頑として英訳の天覧を求められる [...]

聖書の賛美 さて今や真理なき信心とは何か。神の御言葉なき真理とは何か、それなしに何が真理を守るのか。聖書なくして神の御言葉がどうしてわかろうか、それなしに我らは確信できようか。我らは聖書を繙くよう命じられている。繙いた上で熟読するよう奨められている。知ろうともしない者、なかなか信じようとしない者も戒められている。その書は救いについての知識を付けてくれ

るものだ。我らがうかつでも、知らせてくれよう。道から逸れても、家へ連れて行ってくれよう。条理を外れても、改心させてくれよう。沈んでも、慰めてくれよう。落ち込んでいても、活気づけてくれよう。寒くとも、暖めてくれよう。“Tolle, lege; tolle, lege”、取って読みなさい、聖書を取って読みなさい。[...]それは鎧であるのみならず武具の庫というべきで、攻守双方のものであって、それによって我らはおのれを救い、敵を敗退せしめよう。それは草でなく樹木であり、むしろ生命の木の樂園というべきもので、月ごとに実を結び、その実は食用となり、葉は薬用となる。それは話に聞くだけのマナのつぼ、あの一・二食の用を足してくれる霊液のつぼにあらず、たとえ大勢でないにしても全員を満たしてくれる天から降るパンのようなもの、そして油つぼの豊富な地下室ともいうべきで、それによって我らの用はみな満たされ、負債も返済されるだろう。いわば墮落した伝統に抗する健康食の店であり、[...]有毒の異端に抗う防腐剤を売る医者のお店で、反乱心に対する有益な法典であり、心に萌す卑しいものを封じる貴重な宝石の宝庫でもあって、果てには永遠の命へと吹き上がる清水の泉なのである。 [...]

翻訳の必要 だが自分が理解しえぬことに人はどう瞑想すればよいのか。未知の言語に閉ざされたままのものを、どう理解しろというのか。こうも書かれている。「我もし国語の意義を知らずば、語る者に対して夷人となり、語る者も我に対して夷人とならん」。使徒はいかなる言葉も除外しない、最古のヘブライ語も、最も語の豊かなギリシア語も、最良のラテン語も。自然が自然人に教えるのは、知らない言語のなかでは我らもみな、そのまま聾となることを認めよということ、その聞こえぬ耳を向ける羽目になってしまう。スキタイ人には、言葉の通じぬアテナイ人は夷人であり、ゆえにローマ人にしてみればシリア人もユダヤ人もまた同じ(聖ヒエロニムスでさえ、どうにもわからぬということヘブライ語を夷人の言葉としたほどだ)。さらにコンスタンチノーブルの皇帝も、ラテン語を夷人の言葉と呼んだが、そのため教皇ニコラウスの怒りを買うことになった。またキリストはるか以前のユダヤ人も、他のあらゆる国を夷人と大差ない *lognazim*[蕃人]呼ばわりした。ゆえに、ローマの元老院にはいつも通訳と呼ばれるものがひとりないし複数いるという嘆きがあるように、教会が同様の窮状へと陥らぬよう、翻訳を備えておく必要があるわけである。翻訳とは、光が差し込むよう窓を開くこと、その実を食べられるよう貝の殻を割ること、至聖なる所を覗けるよう幕を脇へ引くこと、水に手が届くよう井戸の蓋を外すことなのだ、まさしくヤコブが石を井戸の口から転がし除け、それによってラバンの羊の群れが水飲みできたように。民の話す言葉への翻訳がなければきっと、無学な人々はまるでヤコブの(深い)井戸のそば、手桶や水を汲む道具も持たぬ子どものごときものとなる。もしくはイザヤの言うあの者たちのようだ。封じられた書物を「これをどうか読んでください」と手渡され、「封じてあるから無理だ」と答えるほかなかったあの者たちの。

ヘブライ語からギリシア語への旧約の翻訳 [...]

ヘブライ語・ギリシア語からラテン語への翻訳 [...]

現地語への聖書の訳出 [...]

聖書は母語で知らしめられるべきことを不本意とする我らが大敵 [...]

この作業に反対する我らが同輩ならびに敵の主張と理由 [...]

我らが同輩への返答 [...]

我らが敵の非難への応答 [...]

翻訳者一同の目的、その人数、素養、配慮 さてこの話からは離れ、自分たちの目指すところ、どのような経緯から我らがここで聖書を精読・熟読することを引き受けたのかを、簡潔に示す頃合いである。まこと、善きキリスト者たる読者よ、我らは初めから新訳作成の必要がある、または[従来からの]拙い訳を立派な訳にしなければならないとは考えたことはなく、[...]立派な訳を改善すること、つまり立派な諸訳から、異論の余地もない、代表格の良訳を作ることを考えたのであり、それを我らの務めとし目標としてきた。その目的に多くが選ばれたが、みなおのれの眼より他人の眼から見て偉大な人物であり、そして自らの賞賛よりむしろ真理を求めた。[...]そしていかにしてこの人々は集ったのか。いわば人の力として、自らの学識を信じたからか、あるいは頭の鋭さや分別の深さを任じたからか。いや人の手ではない。一同が頼りとしたのは、ダビデの鍵を持ち、戸を開け誰ひとり閉め出さない人物である。聖アウグスティヌスが行ったのと同じ意図から、主に、我らが主なる父に祈りを捧げた。「あなたの聖書が我が清純なる喜びでありますように。また聖書においては我も欺かれず、また我自身も聖書で人を欺かざらんことを」と。この信に基づき、またこの信仰とともに、一同は集ったのである。互いに煩わぬよう、多すぎはしなかった。だが多くの遺漏の起こりえぬよう多勢ではあった。一同に身の前に備えたものは何かと問えば、それはまこと旧約聖書のヘブライ語本文であり、新訳のギリシア語であった。これらは二本の金管、むしろ導管であり、そこを通じてオリーブの枝は金に移り変わる。[...]伝えられたことが本当ならば、七十人訳聖書は七十二日で成し遂げられたことになるが、我らは七十人訳のように大急ぎで進めることはしなかった。伝説が本当ならば、聖ヒエロニムスは書く端から原稿を取り上げられて出版され、手直しも許されなかったとのことだが、彼のように、ひとたび終えてまた見直すことを禁じられたり妨げられたりはしなかった。要するに、我らは聖書英訳に着手した最初の者ではなく、聖書注釈に手を付けたという点で最初の者であったオリゲネスも、ゆえに何度も手が滑ったとしても不思議ではなかったと記されているのであるから、我らは先人の助けを借りることを忘れなかった。ゆえにこうしたことはなく、この仕事は七十二日のやっつけとはならず、どうも少なくとも従事者に七十二日の十四倍かそれ以上の労をかけている。これほどに大変かつ重要なことは、じゅうぶん熟してこそ万事上手いくものである。というのも、大切な仕事では、人は、時間をかけることが必要ならそのために誹られることも恐れたりしない。だからこそ我らはためらわずにあらゆる翻訳者や注釈者を参考にした。カルデア、ヘブライ、シリア、ギリシア、ラテンのもののみならず、スペイン、フランス、イタリア、オランダのものまでも。我らはすでになされたものを改訂することも、叩き上げられたものをまた金床に戻すことも、あえてよしとした。その分、有用な助けになるとして活用し、遅れに対する非難も恐れず、早くこなせばもらえる賞賛をも欲しがることなく、長々とかけてとうとう、我らのそばにいます主の御手を通じて、今日の前にある完成品にまで仕上げたのであった。

蓋然性が大きいところで欄外に多様な意味を記した理由 [...]

我々が用語の一致に固執しなかった理由 親愛なる読者よ、知らせた方がよいと思われることがもう一つある。我らは言い回しの統一や、用語の[原語との]一致にこだわることはしなかった。おそらくは、これまでもどこかの学識ある人々が、これまでもそのように最大限厳密であり続けたの

だからと言って、やはり我らにもそうしてほしいと願う者もいるだろう。なるほど以前に訳されたものの意味と変えてはならないのかもしれない、その言葉がどちらの箇所でも同じ意味を表すのならば(というのも各所で同じ意味にはならない言葉もあるのだから)、我らも自らの務めに従ってとりわけ注意を払って意識をした。しかしながら、あるひとつの言葉にはひとつの概念を必ず宛てねばならぬとして、たとえば、ヘブライ語またはギリシア語を訳す際にひとたび *purpose* と訳せば、けっしてそれを *intent* とは呼ばないこと、*journeying* とするならけっして *travelling* とはしない、*think* としたらけっして *suppose* とはせず、また *pain* とすれば絶対に *ache* とはしないし、あるものが *joy* ならあとで *gladness* としない等々。このように杓子定規にしてしまうと、学ぶというよりむしろ面白がってしまうのではないかと思うし、そうすると信心ある読者に益をもたらすというより、むしろ不信心な者に物笑いの種を与えるだけではないだろうか。なぜかと言えば、神の国はもう言葉や音節になっているのではないか。無理をしなくてもよいのに、なぜわざわざそんなものに束縛されねばならぬのか。じゅうぶん適切なふさわしい語が他にも使えるのに、どうして厳密に使わねばならないのだ。[...]最後に、我らはかたや清教徒たちの行き過ぎた几帳面は敬遠しつつ、他方ではカトリック教徒の不可解な言葉使いをも避けた。清教徒たちは従来の教会用語を捨てて、たとえば *baptism*[洗礼]を *washing* とし、*Church*[教会]の代わりに *Congregation* と、他のものに置き換えている。カトリック教徒も *azymes*[徐酔祭]、*tunic*[祭儀用の法衣]、*rational*[胸当て]、*holocausts*[全燔祭の供物]、*praepuce*[前の皮]、*pasche*[過越祭]など、そのようなものがたくさん最近の翻訳では溢れているが、これは意味をあやふやにするためである。彼らはやむをえず聖書を英訳せねばならなかったため、せめてそうした言葉によって、理解できないようにしておこうとしたのだろう。だが我らの望みは、聖書がカナーンの言語におけると同様あるがままに話すこと、聖書がこの現地語でも等しく理解されることなのである。

親愛なる読者よ、もし序文の適度な分量をすでに越えていなければ、まだたくさん知らせておきたことはあったのだが、仕方がない。[...]光が世に差し込むなら、光より闇を愛することはない。食物や衣服が差し出されるなら、裸で歩くことも飢えることもない。[...]アーメン。

.....

【著者紹介】

大久保友博(OKUBO Tomohiro) 大阪市立大学・同志社大学・龍谷大学ほか非常勤講師。修士(人間・環境学)。翻訳理論・英国翻訳論史専攻。〈大久保ゆう〉名義にて文芸・美術書等の翻訳に携わる。
連絡先: holmes@alz.jp

.....

【参考文献】

- Amos, F. R. (1920). *Early Theories of Translation*. New York: Columbia University Press.
- Backhouse, J. (1995). *The Lindisfarne Gospels*. London: The British Library.
- Backhouse, J. (1981). *The Lindisfarne Gospels*. Oxford: Phaidon Press.
- Braden, G. et al. (eds.) (2010). *The Oxford History of Literary Translation in English, vol. 2: 1550-1660*. Oxford: Oxford University Press.

- Brown, J. (1912). *The History of the English Bible*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cooper, W. R. (ed.) (2002). *The Wycliffe New Testament (1388): An Edition in Modern Spelling with an Introduction, the Original Prologues and the Epistle to the Laodiceans*. London: The British Library.
- Cooper, W. R. (ed.) (2000). *The New Testament Translated by William Tyndale: The Text of the Worms Edition of 1526 in Original Spelling*. London: The British Library.
- Copeland, R. (1991). *Rhetoric, Hermeneutics, and Translation in the Middle Ages: Academic Traditions and Vernacular Texts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (ed.) (2013). *Tyndale's Bible: Saint Matthew's Gospel Read in the Original Pronunciation*. London: The British Library Board.
- CTMS (The Center for Thomas More Studies). (ed.) (2003). *Dialogue Concerning Heresies, CW 6*. Dallas: The University of Dallas.
<http://thomasmorestudies.org/Heresies_Concordance/framconc.htm>
- Daniell, D. (2003). *The Bible in English: Its History and Influence*. New Haven: Yale University Press.
- Daniell, D. (ed.) (1992). *Tyndale's Old Testament: Being the Pentateuch pf 1530, Joshua to 2 Chronicles of 1537, and Jonah; in a Modern Spelling Edition*. New Haven: Yale University Press.
- Daniell, D. (ed.) (1989). *Tyndale's New Testament: in 1534; in a Modern Spelling Edition*. New Haven: Yale University Press.
- Dove, M. (2007). *The First English Bible: The Text and Context of the Wycliffite Versions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (ed.) (2008). *The Oxford History of Literary Translation in English, vol. 1: to 1550*. Oxford: Oxford University Press.
- Forshall, J. and F. Madden (eds.) (1850). *The Holy Bible, Containing the Old and New Testaments, with the Apocryphal Books, in the Earliest English Versions Made from the Latin Vulgate by John Wycliffe and His Followers, 4 vols*. Oxford: Oxford University Press.
- Green, J. P. (ed.) (1985). *The Interlinear Hebrew-Greek-English Bible, 2nd ed., 4 vols*. Peabody: Hendrickson Publishers.
- Kinney, A. M. (ed.) (2013). *The Vulgate Bible: Douay-Rheims Translation, 6 vols*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Norton, D. (2011a). *The King James Bible: A Short History from Tyndale to Today*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Norton, D. (ed.) (2011b). *The New Cambridge Paragraph Bible with the Apocrypha: King James Version, rev. ed.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Norton, D. (2000). *A History of the English Bible as Literature*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pollard, A. W. (ed.) (1985). *The Holy Bible: An Exact Reprint in Roman Type, Page for Page of the Authorized Version Published in the Year 1611*. Tokyo: Kenkyusha.
- Pollard, A. W. (ed.) (1911). *Records of the English Bible: The Documents Relating to the Translation*

- and Publication of the Bible in English, 1525-1611*. Oxford: Oxford University Press.
- Purvey, J. (tr.) (2011). *Wycliffe Manuscript New Testament: Circa A.D.1400*. Fallbrook: C.I.Y. Publishing.
- Rhodes, N. (ed.) (2013). *English Renaissance Translation Theory*. Cambridge: Modern Humanities Research Association.
- Robinson, D. (ed.) (2002). *Western Translation Theory: From Herodotus to Nietzsche*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Rogers, J. (ed.) (2009). *Matthew's Bible: A Facsimile of the 1537 Edition*. Peabody: Hendrickson Publishers.
- Skeat, W. W. (ed.) (1878). *The Gospel According to Saint John in Anglo-Saxon and Northumbrian Versions Synoptically Arranged: With Collations Exhibiting All the Readings of All the MSS*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, M. et al. (trs.) (2011). *Holy Bible 1611 King James Version: 400th Anniversary Edition*. Grand Rapid: Zondervan.
- Tadmor, N. (2010). *The Social Universe of the English Bible: Scripture, Society, and Culture in Early Modern England*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tiller, J. (2004). Smith, Miles. *Oxford Dictionary of National Biography, vol. 51*. Oxford: Oxford University Press. 259-260.
- Tregelles, S. P. (ed.) (1841). *The English Hexapla*. London: Bagster.
- Tyndale, W. (tr.) (2008). *The New Testament: A Facsimile of the 1526 Edition*. London: The British Library.
- Walter, H. (ed.) (1850). *An Answer to Sir Thomas More's Dialogue*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wheale, N. (1990). *Writing and Society: Literacy, Print and Politics in Britain 1590-1660*. London: Routledge.
- Whittingham, W. et al. (trs.) (2007). *The Geneva Bible: A Facsimile of the 1560 Edition*. Peabody: Hendrickson Publishers.
- Willoughby, H. R. (ed.) (1942). *The First Authorized English Bible and the Cranmer Preface*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Wright, Ch. (ed.) (2011). *The English Hexapla: The Gospel of John, Six of the Earliest Translations of the Bible into English*. Bristol: White Tree Publishing.
- Wright, W. A. (ed.) (1909/2010). *The Authorized Version of the English Bible 1611, 5 vols*. Cambridge: Cambridge University Press.
- バターワース, チャールズ・C、斎藤國治[訳](1980)『欽定訳聖書の文学的系譜(1340-1611)』中央書院
- ボブリック, ベンソン、永田竹司[監修](2003)『聖書英訳物語』柏書房
- ダニエル, デイヴィド、田川建三[訳](2001)『ウィリアム・ティンダル ある聖書翻訳者の生涯』勁草書房

- ギルモア, A、本多峰子[訳](2002)『英語聖書の歴史を知る事典』教文館
- 浜島敏(2003)『聖書翻訳の歴史——英訳聖書を中心に——』創言社
- 翻訳委員社中[訳](2014)『文語訳新約聖書 詩篇付』岩波書店
- 共同訳聖書実行委員会[訳](1991)『和英対照新約聖書 新共同訳/TEV』日本聖書協会
- 永嶋大典(1988)『英訳聖書の歴史 付:邦訳聖書小史』研究社
- 大久保友博(2010)「翻訳における一軸的批評の解体」日本通訳翻訳学会第11回年次大会口頭発表
- 大久保友博(2011a)「ジョン・デナムの翻訳論——〈作品〉への予感」『歴史文化社会論講座紀要』8: 49-68. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博(2011b)「ジョージ・スタイナーと翻訳の現象学」日本通訳翻訳学会関西支部第27回例会口頭発表
- 大久保友博(2011c)「私訳:George Steiner's *After Babel*」日本通訳翻訳学会関西支部第27回例会配布ハンドアウト
- 大久保友博(2011d)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・デナム 二篇」『翻訳研究への招待』6: 17-31. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2012a)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・ドライデン 前三篇」『翻訳研究への招待』7: 107-124. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2012b)「ロスコモン伯と翻訳アカデミー」『関西英文学研究』6(2012): 13-20. 日本英文学会関西支部
- 大久保友博(2013a)「近代英国翻訳論——解題と訳文 キャサリン・フィリップス 書簡集(抄)」『翻訳研究への招待』9: 129-140. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2013b)「George Sandys: 旅は訳詩とともに」17世紀英文学会関西支部第191回例会口頭発表
- 大久保友博(2013c)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ロスコモン伯ウエントワース・ディロン」『訳詩論』(抄)『翻訳研究への招待』10: 65-82. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2014a)「『転身譜』第15巻跋詞の訳におけるジョージ・サンズの変容」『歴史文化社会論講座紀要』11: 55-65. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博(2014b)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ホラーティウス『詩論』(抄)とその受容」『翻訳研究への招待』11: 35-44. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2014c)「近代英国翻訳論——解題と訳文 トマス・フランクリン『翻訳:あるひとつの詩』」『翻訳研究への招待』12: 155-172. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2015a)「Opening to Everyone: From Wycliffite's Bible to the Authorized Version」『歴史文化社会論講座紀要』12: 43-62. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博(2015b)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・ドライデン 後四篇」『翻訳研究への招待』13: 83-102. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 大久保友博(2015c)「ドライデンの翻訳論と中庸の修辞」『十七世紀英文学を歴史的に読む』金星堂 211-231.
- 齋藤勇(1944)『文學としての聖書』研究社

田川建三[訳](2013)『新約聖書 訳と註 第五巻』作品社

田川建三(1997)『書物としての新約聖書』勁草書房

寺澤芳雄(1985)『翻刻版『欽定英訳聖書』——文献学的・書誌学的解説——』研究社

八木谷涼子(2012)『なんでもわかるキリスト教大事典』朝日新聞出版

